## 2月第3週の礼拝説教

■日 時:2024年2月18日(日)10:30~11:30 受難節第1主日礼拝

■説 教: 保科けい子牧師

■聖 書:新約:ヘブライ人への手紙4章1~16節(新約 p405)

■説教題:「 憐れみを受け、恵みにあずかって 」

■讃美歌:13「 みつかいとともに イェスのみ名の 」

294「ひとよ、汝が罪の大いなるをなげき、」

教会の暦によりますと、先週の水曜日 2 月 14 日が灰の水曜日と呼ばれ、3 月 30 日 (土) までが受難節になります。今はスマホやパソコンなどで検索しますと、短時間の うちに「受難節」の意味や由来などが見つかります。例えば、キリスト教とはあまり関 係のないあるサイトでも次のように説明されています。途中少し省略しますが、読んで 見ます。「イースターまでの46日間が受難節です。この期間中、キリスト教徒は、イエ スの十字架上の死をしのび、悔い改めと真摯な祈りに多くの時間を当て、又、嗜好品を 避け食材にも配慮した日常生活を送ります。受難節は英語で Lent と言い、そのまま日 本語としても使われてきました。Lent は断食を意味する昔のゲルマン系(古ドイツ語) の言葉から今の英語になったものです。イースターが英語圏を中心とした呼称と同様、 レントも英語圏中心であり、ラテン語圏の国を初めその他の国々では 40 を意味する言 葉で呼ばれております。・・・キリスト教が北方のゲルマン系民族に接した時、受難節 が断食の期間であることから断食を意味する彼らの言葉を用いたものと思われます。 | とあります。そして、40日に関する聖書の箇所を何か所か取り上げながら、325年のニ カイア公会議で 40 日間が守られるように決められたことまで言及されています。その 上で、その40日間についてマタイによる福音書の「荒れ野の誘惑」の箇所まで示して、 受難節(レント)が主イエスが公生涯の初めに 40 日 40 夜断食されたことから来ている ことなども記されています。もちろん、このサイトの著者はキリスト教関係の方でしょ うが、このように丁寧に説明されていると、礼拝の中で牧師が下手な説明をするよりも、 なんとなく説得力があるような気がします。本日の日本基督教団の聖書日課でも、福音 書はマタイによる福音書 4 章 1 節から 11 節までが取り上げられており、受難節第一主 日を意識しているのでしょう。しかし、私は先ほど読んでいただいたヘブライ人への手 紙4章1節から 16 節を本日の聖書箇所として選びました。 なぜなら、 私自身、 今年にな ってからの説教では、主なる神様から大きな賜物をいただいた私たちは、主イエス・キ リストと共に、聖霊に支えられながら、どのように歩むかということを、主の日ごとに 与えられた聖書日課の中から選んできたからです。

そういうわけで、本日が受難節第一主日であることを覚え、これからの40日間に主イ

エスの苦難を心に留めて歩んでいこうという思いを新たにされながらも、本日の礼拝で はヘブライ人への手紙4章12節から16節をご一緒に読んでまいりましょう。もし、主イ エスの苦難ということと本日の聖書箇所を関連付けるなら、15節の「この大祭司は、わ たしたちの弱さに同情できない方ではなく、罪を犯されなかったが、あらゆる点にお いて、わたしたちと同様に試練に遭われたのです。」という御言葉であると思います。 主イエスの試練を苦難と言い換えるならば、私たちはすぐ十字架を思い浮かべます。そ の苦しみは、通常の十字架刑の苦しみに加え、全世界の全ての罪に対する神の怒りが、 一挙に主イエスの上に臨んだのですから、想像を絶するものだったことでしょう。しか し、主イエスはそれ以前に、私たちがこの世で味わう様々な苦しみや試練も私たちと同 じように味わわれた、というのがヘブライ人への手紙の著者が語っている重要な点にな ります。4つの福音書の中には、先ほども紹介しましたが、40日40夜にわたる断食の間の 飢餓の苦しみ、親しい友が死んでしまったので涙を流してしまったほどの悲しみ、十字 架の前夜の「イエスは苦しみもだえ、いよいよ切に祈られた。汗が血の滴るように地面 に落ちた。」と描かれるほどの苦しみなどが記されています。そして、これらのことは 旧約聖書のイザヤ書53章3節4節に「彼は軽蔑され、人々に見捨てられ/多くの痛みを負 い、病を知っている。彼はわたしたちに顔を隠し/わたしたちは彼を軽蔑し、無視し ていた。4 彼が担ったのはわたしたちの病/彼が負ったのはわたしたちの痛みであっ たのに/わたしたちは思っていた/神の手にかかり、打たれたから/彼は苦しんでい るのだ、と。」とすでに預言されていたことでした。

ところで、ヘブライ人への手紙の4章14節は「さて、わたしたちには、もろもろの天 を通過された偉大な大祭司、神の子イエスが与えられているのですから、」と書き出さ れており、ここから5章にかけては「大祭司キリスト論」と呼ばれる重要な箇所になって います。この後に続けて、先ほど取り上げましたように、その大祭司イエスが、「まこと の神」であると同時に「まことの人」でもあったということが述べられているのです。 神と等しい方、神の位格をもった方が、まことの人として、私たちと同じ立場に立たれ たということです。その頃のエルサレムに君臨していたであろう、苦しみも悲しみもな く超然としている大祭司という存在については、このヘブライ人への手紙においては語 られていないのです。だからこそ、その大祭司であり、神の子である主イエスの「憐れ みを受け、恵みにあずかって、時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの 座に近づこうではありませんか。」と勧められているのです。「憐れみ」と「恵み」と は、初代教会においてしばしば挨拶の言葉として対になって用いられていたと言われて います。私は、礼拝の最後の祝祷をするときに「主イエスの恵み」と祈り出しますが、 その時にはいつでも昔から耳に馴染んでいた「慈しみと憐れみに富たもう主」という言 葉を思い出して重ねて祈っています。その慈しみと憐れみを受けている私たち一人一人 だからこそ、ヘブライ人への手紙の著者は「公に言い表している信仰をしっかり保とう」

という勧めや「時宜にかなった助けをいただくために、大胆に恵みの座に近づこうではありませんか。」という勧めを語りかけているのだと思います。

最後に、なぜ、本日の聖書箇所は4章12節からになっているのかを考えてみました。本 来なら、4章12節13節は、ヘブライ人への手紙を大きく分けて考えるときの第2部の結 びの部分になります。しかし、大祭司キリスト論の前触れとして読んでいくのであれば、 ここでの「神の言葉」は「生きており、力を発揮し、どんな両刃の剣よりも鋭く、私た ちの心の思いや考えを見分けることができます。」という絶対的なものなのだと宣言し ていることになります。また「更に、神の目にはすべてのものが裸であり、さらけ出さ れているのです。| と言い切れるのは、神の言葉のそのような力によって、著者がこれま で生かされてきたからだと思います。そのように私たちに、主なる神を信じさせ、イエ ス・キリストを信じさせてくださるのは、神の言葉です。私たちも、その一点に立ちた いと思います。私自身が牧師への道を示された後で、親しい友人と語り合っていた時に 突然、その当時は口語訳の聖書でしたが、「神のみまえには、あらわでない被造物はひ とつもなく、すべてのものは、神の目には裸であり、あらわにされているのである。こ の神に対して、わたしたちは言い開きをしなくてはならない。」という本日の聖書箇所 ヘブライ人への手紙の4章13節が思い浮かびました。主なる神様への絶対的な信頼を示 され、今も私を支えてくれる御言葉の一つになっています。まるで、バロック音楽の通 奏低音のように、私自身の歩みの底にはいつでも流れているのです。それゆえに、50年 以上にわたって主日礼拝への招きの言葉を聞き続け、同じように主に招かれた方々と共 に、礼拝の恵みに与かって来ることができたのだと思います。そして、今日もまた皆様 方と共に、憐れみを受け、恵みにあずかるときを重ねることができました。共に感謝い たしましょう。